

記念講演

演題「世界からのメッセージ」～平和と命の大切さ～

講師 フォトジャーナリスト 渡部陽一先生

1 何故、戦場カメラマンとなったか。

学生（二十歳）の時、ジャングルで野生動物を狩猟して生活しているピグミー族の話を聞いて、貯金をはたいて格安旅行でアフリカに行った。ジャングルでは、内戦により子ども達が銃を持ち戦っていた。血だらけの子ども達が学生で旅行者の自分に助けを求めてきたがどうすることもできなかった。

この子達のために、自分は何が出来るか考え、悲惨な現実を写真に撮って世界中の人に知らせることができればと考えた。

24年間の取材で気づいたのは、戦争状態の2ヶ国では、何の解決も出来ない。第三者が仲介するほかないが、そのためには、戦争当事者のことを詳しく知る必要がある。そのためにも、写真を撮影して発信している。



2 戦場での子ども達の様子。

イラクの膨大な石油を巡って戦争が勃発。当時、使用された劣化ウラン弾は、地下水にしみこみ、放射能に犯された動物、植物を通して胎児に影響を及ぼした。生まれながらにして染色体異常、白血病、悪性腫瘍など発症。国境なき医師団が立ち上がり、その子ども達を助けようとしたが、テロリストによって拘束されたり殺されたりした。広島からも薬が届けられたが燃やされた。イラク人のナジム先生はパキスタンで学校を開設した。女性に学問は不要であるというなか、14歳の女の子がブログで自由に勉強がしたいと発信したところ、タリバンの兵士によって頭を打ち抜かれた。奇跡的に一命を取り留め、教育の重要性を訴え、1本のペン、1冊の教科書、1人の先生が必要であることを訴えたマララさんは、昨年、ノーベル平和賞を受賞した。

3 戦場でいかに安全に取材活動をするか。

現地ガイド1名、通訳1名、ガードマン1名等最低4名のスタッフが必要。

どんなに興味深い事があっても、ガイドの指示は絶対。命を守るためには、チームで行動すること。取材のために、ジャーナリストビザ、プレスカードなど、その国から支給された身分証明書は必要不可欠であるが、イスラム国は、国としての体をなしてない。誰が敵で誰が味方か不明。現地の人々が、外国人ジャーナリストを見れば、情報をイスラム国に流すことにより、利益を得る事が出来る。その結果、外国人が拘束されたり殺されたりする、大変、危険であり、今までに無い恐ろしさがある。今までの取材方法では、安全が確保出来ない。そうした危険地区の取材を成功させるためには、80%が事前準備、20%が取材という比率で安全を最優先し、今後とも、紛争地帯の子ども達の現状を世界に発信していきたい。

報告者 (公財) 広島県私立幼稚園連盟広報委員長 平原弘史 (宝徳幼稚園)

